

論文名：顎矯正手術が顎変形症患者の QOL に及ぼす影響

新潟大学大学院医歯学総合研究科

氏名 倉部 華奈

【緒言】

顎変形症は顎顔面の形態異常や咬合異常をきたし美的不調和を示す疾患で、患者の心理面に影響を及ぼすとされている。外科的矯正治療は、顎変形症患者の心理面に陽性の影響を与えるといわれているが、全ての患者が治療結果に満足しているわけではない。近年では医療評価研究の 1 つとして、QOL (Quality of life) が重要なアウトカムとされているが、本邦では顎変形症患者の QOL 調査の報告は少ない。また、これまでの顎変形症患者の心理面に関する報告では、調査結果を量的に分析したものがほとんどであるため患者の心理を断片的に捉えるにとどまり、複雑な患者の心理や考えを検討することが困難であったと思われる。そこで本研究では、顎矯正手術が顎変形症患者の口腔関連 QOL に及ぼす影響を OHIP-J54 (Japanese version Oral Health Impact Profile) を用いた量的手法により明らかにするとともに外科的矯正治療による顎変形症患者の心理・社会的変化の過程を質的手法により解析することを目的とした。

【研究 I】

顎矯正手術が口腔関連 QOL に及ぼす影響

1) 対象

対象は 2013 年 12 月から 2015 年 6 月に顎矯正手術を受けた顎変形症患者 65 名（男性 21 名、女性 44 名、平均年齢：23.6±8.1 歳）とし、本学歯学部で歯科的知識を持たない低学年の女性 14 名（平均年齢：19±0.5 歳）を対照群とした。

2) 方法

口腔関連 QOL の評価は、OHIP-J54 を用いて顎矯正手術前と術後 6 か月時に行った。術前と術後ならびに対照群と比較検討し、口腔関連 QOL と年齢、性別、主訴、骨格性分類、術式、術後症状有無（知覚異常、顎関節症状、開口障害）の各因子との関連についても検討した。統計解析には Wilcoxon の符号付順位和検定、Mann-Whitney の U 検定、Kruskal-Wallis 検定、ペアワイズ比較を用いた。

3) 結果

術前と対照群との比較、術前と術後の比較では OHIP-J54 の総合点と全ての領域において術前の患者の方が有意に高い値を示し、口腔関連 QOL が低い傾向を示した。術後と対照群との比較では、機能の制限、精神的不快感以外の領域において、術後の患者群の方が有意に高い値を示した。また、年齢、骨格性分類、術式、術後の顎関節症状や開口障害の有無と口腔関連 QOL との間に有意な関係が認められた。

【研究 II】

質的手法を用いた顎変形症患者の心理・社会的変化の過程の解析

1) 対象

対象は、顎矯正手術施行後 1 年 6 か月以上経過し、臨床的に術後経過が良好な女性患者 6 名とした。

2) 方法

患者自身の病態認識や外科的矯正治療を決意し治療が終了するまでの心理・社会的変化について半構造化面接による聞き取り調査を行った。面接内容は患者の同意を得て録音し、録音データから逐語録を作成し、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) に準じて解析を行った。

3) 結果

『成長過程での悩みの変化』『治療を決断するまでの葛藤』『治療開始から術後までの思い』『退院後の思い』の 4 つのコアカテゴリーが生成された。患者の悩みは思春期に始まり、友人は患者が悩みを持つ過程および悩みの深さに影響を及ぼしていた。《外科的矯正治療の情報》は《将来への期待》を持つきっかけとなり患者の悩みを軽減し、治療中および治療後の心理・社会的変化の過程には友人、家族、同病者が影響を及ぼしていた。治療終了後には様々な苦難を乗り越えた達成感や、喜び、自信が芽生え、社会生活における積極性が向上していた。

【考察】

OHIP-J54 は、OHIP の日本語版で 54 項目の質問からなり、5 段階のリッカート尺度で点数化して 8 つの領域で評価する信頼度が高い口腔関連 QOL の評価法である。これまでの研究では、顎変形症患者の口腔関連 QOL は正常咬合者と比較し低いが、顎矯正手術を施行後に改善することが報告されており、本研究もそれを支持する結果であった。しかし、術後 6 か月時の口腔関連 QOL は正常咬合者と比較すると依然低い傾向にあった。口腔関連 QOL の評価法は種々あるが、OHIP-J54 は顎変形症患者が抱える問題を明らかにするとともに、顎矯正手術が患者の生活の質に及ぼす影響を評価する上で有用と思われた。

GTA はデータに密着した理論を生成することを目的とし、プロセスを重視する質的分析法で、人々の生活や経験、感情などについての研究に適しているが、顎変形症患者を対象とした報告はこれまでない。本研究より、顎変形症患者が自身の顔貌や咬合の異常を自覚してから治療が終了するまでの一連の心理・社会的変化のプロセスについて詳細かつ具体的に明らかにすることができた。しかしながら、対象者を術後 1 年半以上経過した患者に限定し、回顧的にデータを収集したというところに本研究の限界があると考えられる。今後は初診時から治療が終了するまでの各時点において調査を行うことで、本研究では語られなかった新たな一面が得られる可能性があると考えられる。

【結語】

本研究では、量的手法と質的手法を組み合わせることで、一つの手法では明らかになり得なかった顎変形症患者の口腔関連 QOL と一連の心理・社会的変化のプロセスについて詳細に検討することができた。